

# しんらん講座に 参加して みんなの声

## \* 共命鳥

▼正に自分自身の事のようだ。

▼仏教讃歌で覚えた言葉。今回詳しく教えていただいた事で、次からは違う心持ちで歌えそう。

▼本当はどんな世界に生まれたいのかと言う問いを持ち続けたい。

▼穢土・浄土のお話を、次回もう一度お聞きしたい。

▼相反していたものが、なぜ浄土では響きあえるのか。

## \* 遠く宿縁を慶べ

▼コロナや家族葬など、人と人とのつながりが薄い劫濁のこの世ですが、父や祖父や亡き人からの縁によって、お念仏をいただいている私であり、人として生きよと願われている私である事に気が付かされました。

## \* 道・善き人

▼泉先生のような道をつけてくださった沢山の「善き人」に、どうしたら出遇えるのでしょうか。

▼井戸を掘った人がいて、その井戸から出た水を飲んだ人がいます。その人には、水を飲んだ責任がありません。親鸞聖人が私に道を示してくださいました事に感謝し、これからも

聴聞していきたいと思っています。

## \* 葬儀のあり方

▼思いもよらぬ葬儀の形を耳にする事が多くなりました。この事は、コロナ禍の中、ますます拍車がかかっているようです。

▼「五濁の時機」の今こそ、私たちは「前を訪う」事について語り合っていきましょう。



ちょっとおしえて

【質問】  
泉先生の著書を教えてください。

【答え】  
過去にアイヌ民族に関

する小冊子等が出版されましたが、残念ながら現在、新品で購入できる書籍はございません。

## 【質問】

仏教学辞典は仏教語辞典と考えてよろしいですか。仏教の国語辞典のような物が欲しいです。

## 【答え】

法蔵館（書店・京都）より出版されている『仏教学辞典』には、仏教の思想文化に関する用語が多数収録されており、国語辞典のようにご利用いただけます。他にも『岩波仏教辞典』（岩波書店）なども、書店やネットでご購入いただけます。聴聞のお供には是非ご検討ください。



編集委員のひと

部落やアイヌの差別問題に心血を注がれた泉恵機先生が逝去されました。訓覇先生も大きな影響を受けられたそうです。清休寺の法名軸にはご先祖以外に清澤満之師、浅野温知師、高木顕明師など先達の名も掲げられ、その覚悟の程に深い感動を覚えられたそうです。私たちも五濁の今こそ、泉先生の真摯な姿勢に学ばねばならないと思います。（S）

次回開催予定  
5月11日（火）  
14時～  
会場 長浜別院



VOL.2

発行所：長浜・五村別院  
長浜市元浜町32-9  
代表者 宮戸 弘  
編集：両別院教化推進委員会  
お問い合わせ：  
長浜：0749 (62) 0054  
五村：0749 (73) 3133  
FAX：0749 (62) 0754  
MAIL：  
shinran.lect@gmail.com



## 第二講要約

### ① 前を訪う

#### 追悼 泉恵機先生

今日、ここに来る前に、私が大変深いご縁をいただいた泉恵機先生（清休寺住職・元大谷大学教授）の葬儀に参列してまいりました。棺のお姿も拝してきました。ろで、まだその強い余韻の中でここに立たせてもらっています。そこで今回は唐突で申し訳ありませんが、

泉先生への追悼から話に入らせていただきます。

泉先生は、生涯、部落差別問題をはじめとする人権問題に念仏者として向き合い、解放運動の実践に尽くされた方です。特に私が先生から学ばせていただいたのは、真宗の解放運動というのは、差別を受けてきた人の深淵から発せられる、解放への願いに応えるところからはじまり、そこに帰結する運動であるという事です。私はその事を、「問われるもの、願われるものとしての解放運動」といっていただいています。部落差別問題ははじめ多くの課題について

学ばせていただきましたが、私が特に先生を通して出会わせていただいたのが、アイヌ民族差別問題と、非戦と平等を願い続けたがゆえに「大逆事件」に連座して教団を追放され、獄中で命を絶たれた僧侶・高木顕明師にかかる取り組みでした。私は、この二つの課題については、大谷派では間違いなく泉先生が井戸を掘った人だと思っています。先生が亡くなられた今、あらためてその意義の大きさを確かめなければならぬと思っています。

今、井戸を掘った人と言いました。井戸が掘られ

たという事は、そこから水が湧き出たという事であり、その水を飲んだ者がいるという事です。その井戸を掘った人の仕事の意義を本当に実証するのは、それは掘った人の役割じゃないですね。掘って出た水、その水を飲んだ人間、飲ませていただいた人間の役割です。高木顕明師の取り組みで言うなら、水は顕明さんです。顕明さんをこの大谷派、この社会に掘り出してください。その水を私達は間違いなく飲んだのです。私達がその水をどういたしたいのか、そしてその水をいただく事によって、私達のいのちがどう甦っていくのか。その事が井戸を掘った人の仕事の意義を決めるのではないのでしょうか。そういう事でいうと、泉先生個人と出会うというより、高木顕明さんや、アイヌの方たちに、本当に私自身出

会えているのかという事が、泉先生と本当に出会っていないのかという事になるのではないかと。今あらためて自問しています。もう一つ、教団近代史の検証などの取り組みの中で語られた、泉先生の言葉を紹介します。

「歴史」は「資料」ではない。古人の、即ち僕らに血の繋がった先輩達の、鼓動や息吹を、その喜びと悲しみをその紙背に見出し、見出す事によって見出す者の鼓動とそれが一つになるとき、「歴史に出会う」と、それを名づけるのである。



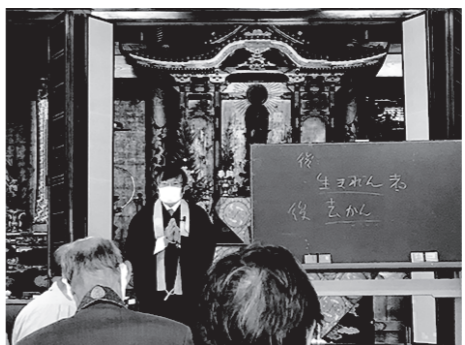
高木顕明師

「前を訪う」この言葉は大谷派で高木顕明師の取り組みのテーマとして用いられてきています。これも泉先生が選ばれた言葉です。この度、先生が浄土にお還りになった事により、あらためてこの言葉の大切さを実感しています。そしてこの言葉は、その人に大きな業績があるから訪うという意味ではありません。人と人の歴史的な繋がりを言い当てる、とても大事な言葉だと受け止めています。そして、前回のアンケートに現在の葬儀の在り方に対する思いが綴られていましたが、その事にも関わる言葉でもあります。『教行信証』の最後に親鸞聖人が、道綽禅師の『安樂集』から引用されている一文にあ

る言葉です。  
前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪え、連続無窮にして、願わくは休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽くさんがためのゆえなり。

私はこの言葉をずっと当たり前のように、前にこの世に生まれてきた者は、後から生まれてきた者は、前に生まれてきた者を訪え、と読んできました。先輩が後輩を指導し、後輩は先輩から学ぶ、という感じで大事なことが伝わっていくという事です。しかし、ここ数年、身内を相次いで亡くし、今日も大事な先生を見送ったのですが、そういう経験の中で、この「前に生まれる」と

いうのは、浄土に生まれるといふ事なのではないかと感じています。実際、手元にある『安樂集』を開くと「後に生まれん者」ところが「後に去かん者」となっています。その言葉を見ますと、ますますその思いが強くなります。



今、身内をなくした経験からと言いましたが、皆さまもご経験があるとありますが、納棺の時、合掌する姿でお納めします。私ははじめその姿を亡くなった方が仏さんに

手を合わせている姿だと思っていました。しかし、本当に身近な者を亡くした時、棺の中の合掌する姿は、私に手を合わせてくれている姿なのではないかと感じたのです。それは私に対してだけでなく、悲しみの中に対面する一人ひとりに「人として生きよ」と願ひ続けてくれる姿でした。そしてその姿を、私の身の奥深くにただくという事が、連続無窮という事なのではないかと。生きている間は、どれだけ身近な者でも、いや身近な者であるからこそ、煩惱を燃やし合い、その人の存在を全て受け入れるという事はできません。しかし片方が煩惱の火を消し、涅槃に入られる事が、その人の存在丸ごとを、私のために生きてくださった存在としていた

だく事を与えてくれるのではないのでしょうか。  
言葉遣いは厳密ではありませんが、色身を滅し法身となり、全ての有縁の人の中に、他已即ち、私として生きてくれる他者として、新たに誕生してくれるのだと思えます。それは、棺の中の姿を、よく変わり果てた姿といいますが、まさしくいのちを終えた姿をしっかりと見つめ、ここから刻むところから始まる事ではないかと思っています。そういう場を開くのが浄土真宗の葬儀なのではないでしょうか。

亡くなった人に縁あった人が、その最期の姿に出会う事を、家族葬などという名の下で、その家族が奪ってしまうという事が広がっています。生と死の分断であり、生きている者、即ち煩惱の働

値観で死をも括り取っていくという事です。それぞれに事情があり、最近のコロナ下という事もありますが、この事も煩惱、命濁の内実と言えるのだと思います。葬儀の持つ大切な意義については、葬儀に携わる私たちが、もともととご同行の方たちと語り合っていかなければならないと思います。

## ②五濁とは 五濁の連関

五濁の内容については前回簡単に紹介し、最後に五濁とはそれぞれ並列してあるのではなく、連関、展開があるのだとお話しました。

私は劫濁を「世の濁り」、見濁、煩惱濁、衆生濁を「人間の濁り」、そして命濁は文字通り「いのちの濁り」と押さえて

います。それについてアンケートの中で「人間の濁りが世の濁りを生むという事か」という感想もいただいています。私は一旦、世の濁りが人間を濁らせるという方向で考えてみたいのです。

## 共命鳥の譬えより

その時に思い起こすのが、『阿弥陀経』にも出てきます「共命鳥」の譬えです。それについては様々な物語があります。が、学生時代に聞いたお話から、私なりの受け止めをご紹介します。

この鳥は、頭が二つで胴体一つの鳥です。二頭の鳥が一つの胴体を共有している形です。それぞれに、カルバ、ウバカルバという名があります。が、穢土、この世に住んでいる時は、互いに常に

この胴体を独り占めしたいと考えます。そしてついに片方が片方に毒を食べさせて殺してしまい、胴体を自分だけのものにしてしまうのです。当然殺した方も命を失ってしまいます。

逆にこの鳥が浄土の鳥として生まれた時は、胴体一つであることを限りなく歓ぶ鳥であったという事です。そして、ともきれいな声で鳴く鳥だと言われます。それは、そうでしょうね、一頭で鳴くのではなく二頭で鳴くのですからハーモニーです。どれだけきれいな声でもハーモニーにはかないません。まさしく共存、というより響存です。そして言うまでもなく、一つの胴体に譬えられるのは、いのちそのものです。前回「根帯」という言葉をご紹介しました

が、そういうものかもしれません。いのちの連帯の中で生きている事を歓ぶ存在と、歓べない存在として描かれています。



ではこの譬えは何を教えてくれているのでしょうか。私は最初この話を聞いた時「何でそんな愚かな鳥が浄土に生まれる事ができたんだ」と感じました。そこには無意識のうちに浄土に生まれる種を、生まれるものに見出そうとしているという事があるのですが、穢土の共命鳥が愚かでのち

を独り占めしようとし、浄土の共命鳥は賢くていのちの連帯を歡ぶという、共命鳥の資質の問題を語っているのではないと思えます。私はこの譬えは、浄土というものはたらきと、穢土というものはたらきを共命鳥の上に表してくれていると領いています。そこに世の濁りと人間の濁り、そしていのちの濁りの連関を学ばせてもらうとともに、これも前回ご紹介した「人心の至奥より出ずる至盛の要求」という言葉にもつながる、私達はどうのような世界に生きたいと願うのか、という大きな問いも生まれてくるのだと思っています。本日はここまでにごさせていただきます。

